彼女が欲しい！！

平山ひろてる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女が欲しい！！

【Ｎコード】
Ｎ９１３３Ｙ

【作者名】
平山ひろてる

【あらすじ】
彼女が欲しい！
そう思って行動を始めた、バカども。
そんなバカどものドタバタを描いた物語です。

草木の香りが漂い、女学生の白い夏服が太陽の下で、燦々と輝く季節。蒸し暑さの中に、青春の香りが漂う、素晴らしき日々。

俺達、『彼女欲しい欲しい同盟』三人の活動は、局面を迎えていた。

彼女欲しい欲しい同盟。それは、中学生時代の友達、性格も体型も違う、高校生三人が集まり、作った団体だ。

その目的は一つ。

『彼女を作る事』

一人は、皆の為に。皆は、一人の為に。彼女を作り作らせる為に、必死に動く。それが、この団体のルールだ。

全員に彼女が出来る日まで、この団体は続く。

そんな夏のある日、「僕はそろそろ告白するよ」と、メガネをくいっとしながら言った、一人のガリベンが突撃した。

「好きです。付き合って下さい」

「えー……嫌だ」

「うわあああっ！」

まず、一人が玉砕した。バカめ。もっと時間を掛けろと言ったのに。

続いて、スポーツバカが「俺はもう落ち着いていられねえ！」と告白に行った。

「好きだ。付き合え」

「うざっ」

速攻でフられた。
「……」
そして、もう一人が玉砕した。
アホだろ、お前ら。

そんなこんながあり、結局最後に残ったのは俺だけになった。
これはそんな俺の、奮闘記である。

「過去ばかり見つめていられない。僕は未来に生きるぞ」
「はあー、なんでダメだったんだ？」
「常識的に考えて、あれじゃダメだろう。君は馬鹿なのかい？」
「フられたお前には、言われたくねーよ」
「ば、バカなっ！　振られたんじゃない、保留されただけだ！」
教室に帰って来た二人は、いつものように、意味のわからない掛け合いをしていた。そんな掛け合いを聞き流しながら、俺はぼうっとしていた。
さて、俺の名前は本田辰巳。成績は中くらい、ルックスも中くらい……と信じたい。彼女いない歴は、年齢に匹敵する。
「また良い女見つけるしかねーな」
と、語るのは、川崎俊太。ルックスは金髪ピアスのヤンキーだが、決して顔は悪くない。しかし、粗暴な性格と、短絡的な思考のせいで、今まで彼女が出来た事は、一度も無い。
「君の良い女の基準が、僕にはわからないよ」
と、のうのうと語るガリベンメガネの名前は、鈴木五郎。成績トップで、性格が悪いわけじゃない。しかし、言動だ。言動がいちいちカチンと来る奴で、彼女が出来た事は、一度も無い。
俺達三人に、彼女が出来た事は無い。中学は男子校で、女子に恵まれる事は無かったからだ。それを言い訳にす
共学の高校にデビューし、女子と接する機会が増える事から、俺達は彼女欲しい欲しい同盟を作った。チャンスを、決して取りこぼ

さない為に、との考えだった。
「おい、辰巳」
「んあ？」
話が俺に振られた。ヤンキー俊太が、俺を見ながら尋ねる。
「お前は、いつコクるんだよ」
「んー」
「そうだぞ。図書委員の、山葉さんだろ。早くしないと、他の奴らに持って行かれるぞ」
ガリベン五郎も続けて言う。
図書委員の山葉さん。フルネームを、山葉晴香と言う。俺は彼女の事が好きだった。他にも狙っている奴が、いるとは聞いているが。いまいち踏み込めずにいた。
「いやさ、まだ全然感覚が掴めねーんだもん」
「感覚じゃねえよ、ほら、こうガーンとな！」
手を広げながら、俊太は豪快に言うが、
「ガーンと行って、失敗したじゃねえか、俊太」
こいつ、それで失敗してるし。何度も。指摘すると、俊太はしゅんとしてしまった。
「それはそうだけどよ……」
まあ、おとなしくして貰っていたほうが、俺としても気が楽だ。
「山葉さんなあ……」
そして俺は、頭の中で想い人の姿を、思い浮かべる。考える度に、胸が締め付けられるような、そんな感覚に襲われてしまう。
「イケメンじゃなくてもいいって、言ってたぞ」
「マジ？」
五郎はメガネをくいっとしながら、確信めいた口調で言う。
「ああ」
しかし、出元不明の情報を信じるわけには、いかない。
「誰から聞いた？」
尋ねると、

「本人に、僕が聞いてやった。幸い、図書室にはよく行くからな」
誇らしげに五郎は答えた。
本人からの情報なら、確かなのだろう。というか、確かでなければ、誰の言葉を信じろと言うのか。しかし、何か胸にモヤモヤしたものが残る。
「ほう……」
「って、俺がイケメンじゃねえって事かよ！」
そして、その事実に気付いてしまった。
「間違ってないだろ？」
「ははは！　違いない！」
五郎と俊太は大きな声で笑う。
「お前ら、こんな時だけ意気投合しやがって……」
普段は、喧嘩ばっかりしてる癖にな。
「仕方ない。僕が図書室に付き合ってやるから、話したらどうだい」
五郎は頻繁に、図書室に行っている。という事は、山葉ともよく話しているのだろう。それなら、多分、俺と彼女を結びつける事も、可能なのかもしれない。
「ありがとう。恩に着る」
「同志だからな。辰巳同志」
拳を合わせ、俺達は笑う。
「……ああ」
そんな中。
「仕方ねえ、俺もついてってやるか」
俊太がわざとらしく、髪を掻き上げるが、
「お前は来なくていい」
「おとなしくしてろ」
俺と、五郎は同時に答えた。すると、彼は何か悔しそうに、
「ちぇっ、絶対についていってやるからな」
恨み言を吐いていた。

図書室。静かな部屋の、カウンターにちょこんと座っている少女が、山葉晴香。俺の想い人だ。

彼女に、五郎は慣れた様子で話しかける。

「やあ、山葉さん」

「あ、鈴木くん。どうしたの？　……あ……」

山葉は笑みを浮かべ、一瞬でそれを取り下げた。その視線の先には、

「……俊太」

「え？　何？」

明らかに場違いの俊太がいた。五郎は呆れながら語るが、俊太には何の事だかわかっていなかった。山葉は、俊太を怖がっているのだ。

「あっち、行ってろ」

「何でだよ？」

頭に疑問を浮かべる俊太の腕を掴み、五郎はどこかへと引っ張って行った。

「すまない、少し席を外す。来い、俊太」

そんな二人を、山葉は見つめていた。

「どうしたんだろ？」

「はは……」

グッジョブ五郎。後は任せた。

「川崎くんは、どうしたの？」

「ちょっと用事があって。いや、大した用事じゃないんだけど」

そういえば、この場。

山葉と二人っきりじゃないか。まずい、何を話せばいいのか、さっぱりわからない。

「そうなんだ。いつも賑やかだよね、川崎くん達。何してるの？」

「あ、あはは……な、何にもしてないしてない」

ぶんぶんと否定の手を振る。『彼女欲しい欲しい同盟』の活動なんて、誰にも言えるわけがない。三人しか知らないのだ。

「ふうん。でも、本田くんも鈴木くんも、川崎くんも皆、性格が違いそうなのに、どうして集まってるの？」
「共通の目的があったからな」
「それって？」
首を傾げ、山葉は俺に尋ねる。
「生活レベルの向上だよ」
としか、答えられない。彼女を作る為の団体、なんてあまりにも、バカバカしい回答、出来るわけがない。
「あはは。何それ」
俺のとんちんかんな答えにも、山葉は笑っていた。
「本当の事言えば、中学の仲間なんだ。男子校だったからな」
それは真実だ。男子校時代の、悪友。それが俺達三人だ。
「へえー……。仲が良くて、羨ましいよ」
「そうなんだ？」
意味深な言葉を紡ぐ山葉に、俺は尋ねる。
「……うん。私、そんなに明るくないし、楽しそうに遊んでる君たちを見てると、私も楽しくなるんだ」
どこか、遠くを見つめながら、山葉は語る。
「へ、へえ……」
やばい、可愛い。どこか憂いを帯びたその瞳が、魅力的に映る。
ついつい、告白の言葉を言ってしまいそうになる。
が、寸での所で踏みとどまった。
「すまない。締めてきた。……ほう？」
五郎が帰って来たからだ。ある意味良かった。あのままコクってフられてたら、五郎の事が、全く言えなくなってしまう所だった。
「そ、そろそろ帰ろうぜ。じゃあまた教室でな、山葉！」
「おう。帰るかい」
帰って来て早々の五郎に、俺は焦りながら語りかける。
「う、うん……。あ、本田くん、鈴木くん、メールアドレス教えて！」

別れ際突然の、山葉の申し出に驚かされた。
「ああ、うん」
「了解した」
その後、俺と五郎は、山葉のメールアドレスをゲットしたのだった。
何だか、とんとん拍子で物事が進んでいるような、そんな気がする。

教室に帰った俺と五郎は、何だかよくわからない自信に満ち溢れていた。
「おいおい、いい感じではないか」
「そう思うか」
「山葉さん、楽しそうだったぞ」
よく図書室に通っている、五郎自身が言うのだ。それは、本当の事なのだろう。
「……脈アリかな？」
「僕に聞くな。お前はどう思ったんだ」
「わかんねえ」
脳内麻薬が分泌され、正常な判断は失われている。現在の俺に、その分別がつくわけがない。
「まあ、焦るな」
「焦って自爆した、五郎にだけは言われたくないぞ」
「はは。過去を見るな。未来を見ろ」
良い事を言ってるようだけどな、五郎。
お前、前も同じ事言ってたぞ。

俊太と二人で、廊下を歩きながら話す。こいつと一緒に居ると、他の生徒に俺までヤンキーとして見られてしまう。
もしかすると、こいつが俺に彼女が出来ない原因じゃないか。そう思っている。いつも。

「あー、んで、あれどうすんの？」
「略しすぎて、何の事かさっぱりわかんねえ」
さすがに、代名詞から内容を掬い取るような高等テクニックは、俺には出来ない。
「山葉ちゃんだよ、山葉ちゃん。早くコクっちまえよ、な？」
やたらと俊太は急かす。
「待てよ、まだ感覚も掴めてないんだから」
こいつ、仲間を作ろうとしてるんじゃないか。そんな疑いを抱き始めた頃、彼は俺に新たな提案をする。
「わかった、じゃあこんなのはどうだ」
「ん？」
どうせ、ロクな事でも無いだろうが。
「俺が、山葉ちゃんを襲う」
「バカやろう」
やっぱり、ロクでも無かった。少々頭に来たので、彼の首を取りあえず固める。
「ぐえ、待てって、俺の話を最後まで聞けよ」
「とりあえず、聞いてやる」
解放を求められ、俺は技を中断する。すると、俊太は意気揚々と計画を告げる。
「俺が山葉ちゃんを襲う、それで、お前が助けに入るんだよ。それで、惚れるんじゃね？」
「ドラマの見すぎだよ」
確かに、助けた人間に惚れる、と言うシチュエーションは、昔から多く存在している。
「いけるって、やろうぜ！」
自信ありげに、彼が推すように、成功の確率も高いだろう。
「でもな、俊太」
「ん？　どした？」
しかし、計画には問題があった。

「山葉さん、お前が俺の友達だって知ってる」
「あー」
このヤンキーと俺は、友達なのだ。それは周知の事実であり、変える事の出来ない不変事実だ。
すると、俊太は新たな提案をする。
「んじゃ、俺の後輩に襲わせるか？」
「バカ、そこから離れろ」
シャレにならない。もしも、間違いが起こったらどうするのか。
「ちぇっ。名案だと思ったんだけどな」
「普通に通報されて、逮捕されたら切なすぎるだろ」
そのリスクだってあるのだ。そうなったら、誰も幸せになれない。
「それもそうだな。うん」
「頼むから、普通に考えてくれよ」
「うーん……」
少々の思考の後、俊太は口を開く。
「とりあえず、接点増やせよ。メルアド聞けば？」
「接点ゼロでコクった癖にな」
接点を増やせと言う俊太は、話した事すら無い女子に告白し、玉砕していた。
「反省を生かせって事だよ、馬鹿」
「うっせ。つか、メルアド知ってる。さっき教えてくれたんだ」
正確には、俺と五郎に、だが。
「マジで？」
きょとんとした声を上げる俊太。
「おう」
「それ脈あるんじゃねえの？　普通、教えないだろ」
「そうかな？」
「どんどん押していけよ！」
胸の前で拳を作り、覇気を込めて語る翔太を見て、俺は気持ちを鼓舞された。

「よし、やるしかねえな！」
メルアドも聞けたし、着実に距離は縮まっている。これはいける、いけるぞ！　俺は自信に満ち溢れていた。

夜。俺達は二十四時間営業のマクドナルドで、いつも通りの『作戦会議』を開いていた。
そんな時だった。
「ん……？」
テーブルの上に置いていた携帯が振動する。振動の時間からすると、電話ではない。
「山葉さんからメールだ」
差出人を見ると、『山葉晴香』と書かれていた。
「マジで？」
「僕には来てないぞ」
五郎の携帯は微動すらしていなかった。つまり、俺にだけメールが送られたという事だ。
「『今度、本田くん達と、遊んでもいい？』だってよ」
本田くん。『達』というのが気になったが、これは遊びのお誘いメールだ。あまりの感動で、身体がぶるぶると震えはじめる。
「おいおい、これはマジで春が来たんじゃねえ？」
「よし、良いって送るんだ。今、今すぐだ」
俊太と五郎も、テンパっている。
「待ってくれよ、俺達だぞ？　俺だけじゃない」
個人が指定されているわけではない。誘われているのは、『彼女欲しい欲しい同盟』のメンバー三人だろう。
「そりゃ、すぐにお前と二人で遊びたいなんて、言えないだろ」
俊太の指摘も、珍しくもっともだ。
「その通りだよ。ほら、早く明日にでも遊べるって送るんだ」
五郎にも背中を押され、俺は震える手で返信を打つ。
「お、おう……」

興奮で、何度も何度も文字を打ち間違えた。それでも、何とか文章を完成させ、それを送った。
「『明日遊ぼう』って送った」
「……おいおいおいおい」
「大進展じゃないか、良かったな、辰巳！」
「よし、お祝いに、ハンバーガー五十個注文だ！」
俺を祝ってくれる二人。このノリ、まだ全く結果が決まったわけではないのに、このテンション。
「やめろやめろ、まだ、決まったわけじゃない！」
初の恋愛成就に期待がかかる、お祝いの空気が、俺達の他に誰もいない、夜のマクドナルドに広がっていた。

その夜、再び山葉から返事があった。
その内容は遊べる事を楽しみにしている、という事と、ずっと機会を伺っていた、という事だった。文章が、可愛い絵文字付きで、送られて来た。
ハートの絵文字、期待しちゃいますよ、もう。俺の心の中は、青天の下でピクニックをする小学生のように、明るい気持ちで満ち溢れていた。

翌日。
「俺達に任せろ」
「そうだ。絶対に、くっつけてやるからな」
学校も終わり、俺達は校門で山葉が来るのを待っていた。
「ありがとう。でも、そう言いつつお前ら、足引っ張りかねないんだけど」
なんか、顔がさっきからニヤニヤしている。こいつら、何か企んでいる。
「いやいや、そんな事をするつもりはないよ。決して、辰巳が妬ましいとか、恨めしいとか、そんな感情は全くないよ」

「そうだぜ！　ないぜ！」
絶対、何か企んでいる。
「白々しい。わかりやすい」
「まあ、愛とは困難の先にあるものなんだよ」
「五郎はポエマーだなあ……」
褒めてはみるが、多分、五郎は何かを仕掛けてくる。その何かはわからないが、絶対に何かを仕出かすはずだ。
「お、来たぜ」
そんな時、俊太が俺の思考を中断させた。
「あ、あの……。お待たせ……」
声の主は、山葉晴香。彼女は、微かに息を切らし、白い頬を茜色に染めている。
「やあ、山葉さん」
「『やあ、山葉さん』だってさ！　ぶは、面白すぎって、ゴメンゴメンマジでゴメン」
会合早々、茶々を入れた俊太に、俺は制裁を加える為、とりあえず頭を思いっきり叩く。
「早速、足引っ張ってんじゃねーか、お前！」
痛がっていたが、自業自得だ。
「こらこら、お二人。お嬢様の前であるぞ」
「口調がワケわかんねえ、五郎」
それを戒める五郎の口調は、謎口調に変化していた。すると、
「ぷっ」
滑稽な俺達を見つめて、山葉は小さく吹きだした。
「へ？」
「やっぱり、本田くん達って、面白いね」
「そうそう、山葉さん。なんで俺達と遊びたいわけ？」
痛みから回復した俊太が、俺が気になっていた事を聞いてくれた。
「それは……」
「あ、なんかの罰ゲーム？」

一言多い、バカ。
「……ううん」
頬を赤く染め、俯く山葉。
これはイカン。イカンです。
「会議ー！」
俺は叫び、三人でスクラムを組み、小さな声で、ひそひそと話す。
「……すっげえ、甘ったるいんだけど」
「……同感だよ。これは、確実にキてるね」
「……何がキてんだよ」
「……そりゃ君、あれだよ。帰り道で、『ねえ、ほんとは二人で遊びたかったんだよ』って来るぞ、多分」
その姿を想像するだけで、感動だ。
「マジかよ！」
興奮した俊太が、一人大声で叫ぶ。
「おい！　あはは、ごめんね、山葉さん」
「うん……。あの、迷惑だったらやっぱり……」
申し訳なさそうに、山葉は呟く。
「そ、そんな事無いから！　むしろ、歓迎だから！」
それは、俺の本心からの言葉だった。
「良かった……」
その可愛らしい笑みは、俺に向けられているものなのだろうか。

その後、俺達はいつものマクドナルドで時間を潰し、カラオケに行き、そして珍しく都会に出て、またマクドナルドに戻って来た。
四人席のテーブルで、俺の隣は五郎。向かいには、俊太と山葉が座っている。これが、いつもの定位置なのだ。それに、一人が加わっただけだ。
いつもは、『会議』をする為に溜まっているが、今日は山葉がいる為、会議が出来ない。
しかし、今回の出来事を振り返ると、俺達と遊んでいた時、山葉

は常にどこか一点を見つめていた。
それが俺か、確信は出来ない。それでも、彼女は恋する少女さながらの、愁いを帯びた瞳で、どこかを見つめていた。
同時に、俺の胸の鼓動は加速を続けていた。
「今日は疲れたなあ」
俺が呟くと、俊太はからかうように笑った。
「いつもより張り切ってたもんな」
「全くだね」
そして五郎は、メガネをくいっと正す。
「ところでさ」
瞬間、場の空気を変える言葉が、俊太から投げ込まれる。
「山葉さんって、好きな人いないの？」
その言葉は衝撃的で、五郎すらも茫然としている。まさか、このタイミングでそれを尋ねるとは、誰も思わなかったし、尋ねられた山葉も、困惑の表情を浮かべている。
「……」
困ったように、視線を泳がせている山葉。その小動物的動作は、俺の中の庇護欲を刺激する。だからか一層、魅力的に映った。
「えっと……」
「いや別にさ、獲って食おうってわけじゃないからさ」
俊太は、戸惑う山葉の領域に、ずけずけと進入してゆく。本来、それは止めるべき行為だと思ってはいたが、彼女の内心を知りたい、という欲求が理性を超越していた。
「いる……よ」
か細い声で、山葉は言葉を紡ぐ。今すぐにでも消え入りそうなくらいの声量、そして顔全体を朱に染め、まるで地面を照らす太陽のように、表情を羞恥に満たしていた。
「え、マジ？　誰？」
軽い口調だが、俊太が緊張しているのは、長い付き合いである俺だから、わかる。

「それは……」
「ああ、ここにいる？　いねーよなあ、ははは！」
極めて冷静なチャラ男を演じながら、俊太はどんどん核心へと、近付けさせてゆく。
しばらくの沈黙。鉄のような沈黙が、場を支配する。静けさが、俺の心を徐々に蝕んでゆく。
そして。
「……うん」
「マジかっ！」
思わず、俊太は立ち上がり叫んだ。胸の鼓動が、最高速にまで引き上げられ、張り裂けんばかりに振動しているのが、自分でもわかる。
「……」
頬を真っ赤に染めた山葉が、一点を見つめている。何かを口に出したかったが、俺には何も言う事が出来なかった。
「え、え、誰？」
「もう言っちゃいなって。ね？」
必死に、俊太は言葉を引き出そうとしてくれている。
やがてその功があり、山葉は、おずおずと腕を上げ、一点を指差す。
「……ずっと、好きでした」
「へ？」
指差されたのは、俺の隣の男。メガネガリベンの、五郎だった。
「はい？」
指差された五郎自身も、まさか自分が選ばれるとは、思っていなかったようだ。
「……優しいし、図書室でいつも手伝ってくれて……他にも……」
山葉は恋の理由を説明しているが、俺と俊太は呆然とするばかりだった。というか、思考が追いつかない。どういう事なんだ？　これは。何が起こっているんだ？

「……」
彼女欲しい欲しい同盟史上、最も意味のわからない出来事が、起こっていた。
「鈴木くん。私と、付き合って下さい」
これはない。これはないよ。
俺のドキドキを、返して下さい。
「すまない。付き合う気はない」
そしてこいつ、好きでもないからって、堂々とフりやがった。本当にそういう性格、変わらないな。
「……だよね」
「まあまあ、気にするなよ。な、な？」
俊太の言葉には、様々な意味が込められていた。
「とにかく、これからも遊ぼうぜ！　友達からだよ、な！」
そして、俊太は俺に目配せをする。
「……うん」
続いて、山葉がこくりと頷く。
こうして、俺の恋は終わった。

って、終わってやるわけがねえだろ！

俺は、脈ナシ判明（結果的）後も、決して諦める事は無かった。
五郎を好いているなら、五郎以上に好かれればいい。五郎に彼女と付き合う気が無いのだから、それをしたとしても、文句を言われる筋合いは無いし、何より、五郎自身も手伝ってくれていた。
山葉はあの後も俺達とも遊んでいる。未だ五郎を好いている気配がまだ残っているが、いつかはこっちに振り向かせてやる。
そして、彼女欲しい欲しい同盟としての活動も決して中断してはいない。
「好きだ。付き合え」
ある日、再び俊太はバカな突撃をした。結果は言わずもがなだろ

うし、俺は再び頭を抱えた。隣の五郎も同様だ。
「えー……やだし」
そして、予想通り玉砕。

俺達は、こんな日々を繰り広げている。傍から見れば、バカバカしい事に映るかもしれない。
それでも、俺達『彼女欲しい欲しい同盟』は、全力で彼女を作る為に、真面目に取り組んでいるのです。

（おわり）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9133y/

彼女が欲しい！！

2011年11月27日12時50分発行